

英和辞書と連結形

Some Remarks on Combining Forms in English -Japanese Dictionaries

東 森 め ぐ み

Among morphological problems, unclear definition of terminology is one of the most crucial. This paper focuses on the definition of combining forms and discusses how to deal with word-formation information, particularly that which concerns combining forms and affixes in the English-Japanese dictionaries. First, this paper observes how dictionaries define combining forms and discusses the necessity of differentiating between combining forms and affixes in dictionaries for English language learners. Although combining forms and affixes are categorically distinct, it is often difficult to differentiate one from the other, even for specialists. Consequently, many dictionaries tend to confuse combining forms and affixes. Furthermore, the present writer maintains that the current methods of categorization are often too confusing for learners. Secondly, this paper examines the treatment of word-formation information in the newly published *Practical Genius English -Japanese Dictionary*. In that dictionary the writer of the present paper tried to put combining forms and affixes together and use the classification into word beginnings and word endings, as was proposed in *LDOCE*². Finally, this paper presents an outlook for the revised version of the dictionary through the application of similar information on word-formation.

1. 導 入 —— 接辞・連結形に関する一般的な認識と取り扱われ方

連結形は接辞とよく似ているが、接辞との違いがはっきり定義されているにも拘らず、同じものが辞書によって接辞として扱われたり、連結形として扱われたりという「ゆれ」が存在していて、誰もそれに対して疑問や不満を表明する気配がないように思われる。

「連結形」と呼ばれるのは、古代ギリシャ語とラテン語において、複合語を構成する要素は、語幹が連結するときの形をとっていたため、要素自体はもともと語である。

連結形の説明は辞書によって少しずつ違いがあるが、大抵は接辞と対比させており、接辞と違って連結形は、単語としての独立性が強いという説明が書かれていることが多い。以下に見出し語 ‘combining form’ について英和辞書の定義の違いを比較してみた：

- ① 連結詞（意味は持つが、複合語の一部としてのみ用いられる形式。例えば open-minded の -minded など）— Wisdom（三省堂：2003）
- ② 連結形（合成語の要素のうち接頭辞・接尾辞よりも独立した意味の強いものをいう；た

たとえばcounter- など) —Super Anchor³ (学研：2003)

- ③ 連結形、結合形 (複合語を作る要素；接頭 [尾] 辞よりも単語としての独立性が強い；hydro- (水), phono- (音) など) —E-Gate (ベネッセ：2003)
- ④ 複合要素 (派生語を作る要素；homo-, hetero-, -graphなど；接頭辞・接尾辞より単語的性質が強い) —New Global² (三省堂：2001)
- ⑤ 結合形、連結形 (合成語の要素；接頭辞・接尾辞より独立した意味の強いもの。例、centimeterのcenti-) —New Victory Anchor (学研：2000)

こうして見ると、定義に微妙なずれがあり、接辞と対比させているにも拘らず、接辞とあまり変わらないような印象を受ける。また、例として挙げているものを調べると、②のcounter-が①③④の辞書の見出しでは「接頭辞」となっていたりする。

また、『小学館プログレッシブ英語逆引き辞典』の解説 (p.13) には、接辞としていたものが徐々に連結形とされ、辞書によって扱いが違うことがだいたい次のように書いてある：

「国内外の英語辞典、英和辞典における造語要素の表示方法で目立つことは、英国系の辞典、たとえばOED系の種々の辞典は、ほとんどが*suf.* (suffix) 「接尾辞」のみを用いて表示している。米国系の辞典には*comb.form* (combining form) 「連結形」と表示されているものでも英国系の辞典は*suf.* と表示する。しかし近年は、オックスフォード系の辞典も「連結形」を採用しつつある。」

2. 辞書使用者にわかりやすい分類方法

このように、辞書によって同じ物を接辞としたり連結形としたり、異なっているという状況は、辞書の使用者にとってわかりずらく、不便である。そこで、大修館書店の『プラクティカルジーニアス英和辞典』(以下PG)では、この問題を解決しようと試みている。

PGの接辞と連結形の取り扱いの実際は後で見て行くことにして、ここでは、その背景となった事柄を論じる。

2.1. Adams (1973)

問題の解決の糸口は、すでにAdams (1973) に僅かな紙面を割いて説明してあることに立ち戻ればいいのだということに気づいたことだった。Adams (1973) は「連結形 (Combining Form)」という言葉は使っていないが、「複合語要素 (Compound-element)」という呼び方をして、その性質を分析している。その複合語要素が、本来の複合語の要素として語彙的であったところから、時と共に「文法的」な性質、つまり「接辞的」な性質を持つようになっていく

ものがある、ということ、Adams (1973, p. 30) では次のように説明している。

「複合語の第2要素の中には語彙的なものと文法的なものの中間のステータスを持つと思われるものがある。(中略) *-dom* や *-hood* は語彙的なステータスから、ずっと文法的なステータスまで来てしまっている。古英語の名詞だった *dōm* は裁判とか権威という意味で、複合語の第1要素によく見られたが、第2要素としては領域・地位・状態の意味で頻繁に見られた。やがて今日では、この第2要素の意味で接辞として生産性を持つようになっていく。(訳責：筆者)」

従って、どの時点の観察かによって、それを連結形とするか接辞とするかが変わり、観察者の判断に任せられている事柄だと言える。そのことを前提に考えるなら、辞書によって接辞となっていたり連結形となっていたりと、扱いが違うことも仕方のないことだと考える。

2.2. 接辞か連結形か

さて、‘billion’ という語がある。これは元はフランス語で、語頭の *bi-* という要素は2という数を表し、‘million’ の二乗という意味だった(研究社『英語語源辞典』参照)。元々 *million* は *OED*² によると ‘large thousand’ という意味で、「無数、つまり数え切れないほどの数」という意味にも使われていたが、*million* がその意味で使われた時代が過ぎると、人間はもっと大きな数を表す語が必要になり、‘billion’ から ‘zillion’ までの語を作り出したのだろう(『新英和大辞典5版』‘million’ の表を参照)。*zillion* は未知数を表す Z (ズイー) と *million* が混ぜ合わさって作られた語で、今ではこれが「無数、すなわち数え切れないほどの数」の意味で使われている。これらの語は全て、数を表す接頭辞と *million* が混ぜ合わされて出来ているが、これは語形成の用語では ‘blending (混成)’ と呼ぶ作り方である。

ところが、出来た語は全て ‘-llion’ という語尾を持っているので、‘-llion’ という接尾辞があるのかと考える場合もあるだろう。しかしこれらは全て *million* から *billion* が出来た時の作り方に倣って作られているので ‘-llion’ は接尾辞ではない。それでも語の要素には違いがないから、「語要素」であり、「語末要素」である。

このように、元は単純語で、そのまま、あるいは短くして多くの語に含まれる要素となったものはたくさんあるが、単純語の形を留めているものは、かつて古典語などから借入された連結形を使って新語が作られたのと似ているため、英語の連結形として扱われるようになったという経緯がある。しかし ‘-llion’ のように短縮されて語の元の形を失ったものについては、単に ‘Word element’ すなわち多くの語に含まれる「語要素」として言わば見過ごされている形だ。しかしまさに ‘-llion’ は ‘million’ の連結形なのである。

この「接辞」「連結形」の区別が専門家の間でも難しいということはすでに述べた。辞書の

扱いも様々だし、時と共に変化するとも言われている。だとすれば、それは大変注意深い観察や議論を要する、高度に専門的な問題だと言える。接辞と連結形の違いの認識は、初学者の段階では難しく、却って混乱を生むかもしれない。そういう難しいところは専門家に任せて、なんとか初学者に分かり易くしようとするなら、語は「語要素」から出来ていて、その中には語頭要素と語末要素があってそれぞれの働きを持っているという説明だけで十分なのだ。

3. P Gの語形成資料の基本形

大修館書店のジーニアスシリーズに新しく加わった『プラクティカルジーニアス英和辞典』は当初、1999年出版の『アクティブジーニアス英和辞典』（以下AG）の改訂版を作る予定で作業が始まったが、その過程で新しい工夫を多く盛り込むことになったので、名前も変えて新しい辞書とすることになった。

筆者が依頼された語形成資料については、とにかく辞書本体から語形成の見出しをなるべく外し、情報を巻末に集中させるようにとの指示があった。この方法は2002年の『ベーシックジーニアス英和辞典』（以下BG）ですでに試みられている。以下にジーニアスシリーズ各辞書の語形成情報を簡単に比較する：

Genius³ [G3] (2001) ; Genius (1988)

辞書本体に見出しとして接頭辞151個；接尾辞217個；連結形281個

(但し見出しに‘combining form’の項なし)

Active Genius [AG] (1999)

辞書本体に見出しとして接頭辞126個；接尾辞195個；連結形197個

Basic Genius [BG] (2002)

辞書本体の見出しは連結形のみ138個；巻末に接頭辞63個・接尾辞38個の一覧あり

(但し見出しに‘combining form’の項なし)

BGでは本体に連結形が138個見出しとして出ているだけで、巻末に接頭辞・接尾辞一覧が5ページあるだけになっている。かなりスリムにされたわけだが、出版社の方からは、BGに習うようにという要請もなかったもので、とにかくAGの改訂だからAGの語形成を変えようと考えた。最初は徹底的に見直すつもりだったが、それには与えられた時間があまりにも少な過ぎるため、短期間に出来てしかも利用価値のある資料を作る方法を考えることにした。

3. 1. P G 語形成資料と類似資料

接辞と連結形の取り扱いが辞書によって様々だということはすでに述べたが、なかでも *LDOCE*² (1987) では、Word beginnings と Word endings という分け方を採用しており（それぞれ145個と161個が巻末リストに載せられている）、以前からこの分け方が接辞と連結形の問題をある程度解決してくれるのではないかと感じていた。つまり、前節でも触れた、接辞と連結形にわざわざ分けても、中学生高校生の学習には却って妨げになるという考え方が基本にある。すなわち、これは接辞でこれは連結形という分類は、専門家の興味の対象であり、大辞典クラスで扱う事柄だということだ。

P G ではこれに倣い、A G の接辞と連結形を全てまとめて「語要素」とし、語頭に付く物を「語頭要素」、語末に付く物を「語末要素」として初学者に分かり易い呼び方にした。さらに意味による分類と品詞による分類のリストを作った。辞書本体には空見出しだけを付けた。以下に P G の語形成情報を簡単にまとめる：

〈1〉 P G 語要素の分類

- ① 従来の「語形成要素」または「造語要素」という呼び名→ これから語を作る材料という印象しかない→ すでに語の要素だから「語要素」とした。
- ② *LDOCE*² の 'word beginnings' 'word endings' という分け方を取り入れた分類方法：
 - 1) 語要素を語頭要素・語根・語末要素に分けた。
 - 2) 語頭要素・語末要素の働きを①意味決定②品詞決定に分けた。
 - 3) ①意味を7つに、②を5つに分類した。

[1] 意味による分類

- 1.1 数・大きさ・量 (41個)
- 1.2 体・性格・様子・特徴 (70個)
- 1.3 国・民族 (11個)
- 1.4 建物・家具・道具 (9個)
- 1.5 [動作主として] …する人 [物]、…である人 [物] (15個)
- 1.6 専門用語に含まれる語要素 (63個)
- 1.7 その他の意味を持つ語要素 (116個)

[2] 品詞による分類

- 2.1 品詞や役割を変える (70個)
- 2.2 名詞語尾 (79個)
- 2.3 形容詞語尾 (25個)
- 2.4 動詞語尾 (10個)
- 2.5 副詞語尾 (9個)

4) アクティブジーニアス (AG) の接頭辞126個・接尾辞195個・連結形197個を3) の分類にかけ、それぞれ語頭要素、語末要素の順にアルファベット順で掲載した。(形は同じで意味1~7、品詞1~5の中で役割が分かれるものは右肩数字で区別し、それぞれに例を与えた。) わずかに要素が欠けていたものを補充した (giga-, poli- など)。

〈2〉 P Gの分類の学習者への配慮

- 1) 前置連結形と接頭辞、後置連結形と接尾辞の区別をつける必要がなくなった。
- 2) 働きの同じ要素がまとめてあるので覚えやすい。
- 3) アルファベット順に検索したい場合は辞書本体を見て、調べたい語要素の詳しい情報が巻末のどこに掲載されているかを見ることができる。

(例) 語頭要素 'be-' →語要素一覧 (1.7, 2.1)

語末要素 '-ish' →語要素一覧 (2.1)

分類上、品詞を変える役割が大きく違う場合は右肩数字で区別して項目を複数作り、同じ役割の中でさらに用法が分かれる場合は一つの項目内で1. 2. 3...と分けて表示した。

P Gのこのリストに近い物として、学研の『ニューヴィクトリーアンカー』(2000) の巻末参考資料「接頭辞・接尾辞・結合形一覧」というのがある(結合形というのは連結形のこと)。しかしP Gを作っていた時にはこの存在を全く意識していなかった。分類の方法も、見比べると分かるように、かなり違っている:

New Victory Anchor (2000) 巻末参考資料「接頭辞・接尾辞・結合形一覧」分類

接頭辞

- (1) 「内」「中」を表す接頭辞 (8個)
- (2) 「外」を表す接頭辞 (3個)
- (3) 「反対」「否定」「禁止」を表す接頭辞 (7個)
- (4) 「無」「不」「悪」を表す接頭辞 (5個)
- (5) 「前」を表す接頭辞 (4個)
- (6) 「後」「次」「副」を表す接頭辞 (4個)
- (7) 「共同」「相互」を表す接頭辞 (6個)
- (8) 「全」「総」を表す接頭辞 (2個)
- (9) 「位置」「向き」「状態」を表す接頭辞 (5個)
- (10) 名詞を表す接頭辞 (2個)
- (11) その他 (1個)

接尾辞

- (1) 名詞をつくる接尾辞
 - (1.1) 「性質」「状態」を表す接尾辞（18個）
 - (1.2) 「人」を表す接尾辞（15個）
 - (1.3) 「女性」「小さい」を表す接尾辞（7個）
 - (1.4) 「物・物質」「場所」を表す接尾辞（5個）
 - (1.5) その他の名詞をつくる接尾辞（10個）
- (2) 形容詞をつくる接尾辞
 - (2.1) 「…性質を持つ」「…のような」を表す接尾辞（13個）
 - (2.2) その他の形容詞をつくる接尾辞（21個）
- (3) 動詞をつくる接尾辞（7個）
- (4) 副詞をつくる接尾辞（4個）
- (5) その他（15個）

結合形

- (1) 「数」を表す結合形（8個）
- (2) 「数量」を表す結合形（16個）
- (3) 「大きさ」「量」「長さ」を表す結合形（7個）
- (4) 「体」を表す結合形（9個）
- (5) 「人」を表す結合形（7個）
- (6) 人の「職業」「身分」を表す結合形（3個）
- (7) 人の「性格」「性質」を表す結合形（9個）
- (8) 「動・植物」「生物」を表す結合形（7個）
- (9) 「精神」「心理」に関する結合形（2個）
- (10) 「空間」「宇宙」「分野」「学問」を表す結合形（9個）
- (11) 「国」「地域」を表す結合形（5個）
- (12) 「外見」を表す結合形（3個）
- (13) 「程度」「度合い」を表す結合形（4個）
- (14) 「位置」「状況」を表す結合形（4個）
- (15) 「性質」「状態」を表す結合形（16個）
- (16) 「機能」を表す結合形（10個）
- (17) 「自己」を表す結合形（3個）
- (18) …の性質の「物」を表す結合形（13個）
- (19) …の状態の「人」「物」を表す結合形（7個）

前出の『小学館プログレッシブ英語逆引き辞典』（1999）でもいくつかの役割に分類してあ

るが、言うまでもなく逆引き辞典は結局語末要素中心の辞典だということが残念だ。しかし「語根」も取り扱っていることに注目したいと思う。

1992年刊行ということで10年以上前の英和辞典だが、小学館の『ラーナーズプログレッシブ』はすでにこの「語根」というものに着目している。辞書本体に同じ語根を含む単語のリストをたくさん載せ、共通要素の学習によって語彙を増やそうと工夫している。

さらにSuper Anchor (2003) では「語源で覚える英単語」として、巻末に語根を34個挙げ、意味と例をリストしている。

4. 結 語 —— 辞書の語形成情報の展望

P G作成後の反省と今後の展望として、学習辞書から「接辞・連結形」という分類を排除して、見た目からも分かり易い「語頭要素・語末要素」という呼び方にしたこと、さらに意味と品詞に関する分類リストを作ったことで、似た種類の要素を探し易くなったということが言えると思う。しかし時間的な制約もあって学習者に役立つ語要素の選定や分類の方法を、十分検討できなかったのは否定できない。今後この資料を改良する機会があれば、もういちど補充と削除を丁寧にやってみたいと思う。P Gは接辞と連結形をまとめて語要素としたが、それに語根も含めて、学習者に「語の構造」を知らせるということもこれからも進めて行きたい。

従来『語形成要素』または『造語要素』とされて来たものには、接辞や連結形があり、それらを使って出来たと考えられるものは派生語と呼ばれている。一方、単純語を組み合わせて作られたものは、複合語である。従って、派生語と複合語は異なるプロセスで出来たものとして区別されて来た。

しかし、複合語の要素の中に強い造語力、すなわち新しい語をたくさん作ることの出来る、接辞的な働きを持つようになるものがある。それらは従来定義されてきた接辞の分類条件に合わないので、最初は複合語要素とみなされるが、次第に接辞として認識され、分類されるようになる。

接辞は置かれる位置によって、接頭辞・接尾辞に区別されるが、連結形は前置連結形・後置連結形と呼ばれ、そういった専門的呼称や、それぞれの性質の違いを区別して覚えることの煩雑さが、これまで『語形成学習』を難しそうな印象にして来た。

ところが、LDOCE² が採用したWord beginningsとWord endingsという分類は接辞と連結形を、Word elementとして一括りにしたもので、位置の違いだけで区別した、大変分かり易いものだった。P Gの巻末語形成資料が『語要素一覧』となっているのは、このLDOCE²の分類がヒントになっている。本来、『語形成』の知識は英語学習に有用なものなので、こうした、学習者により分かり易くする工夫によって、『語形成』が中学生や高校生にも身近になり、良い効果が期待できる。

また、教育現場でも語の構造について学習者の興味を引き出すようにしたい。教師用参考書としては、小野（2004）が、形態論の基本的なことをかなり分かり易くまとめている。しかし連結形や語根といった、形態論ではしばしば議論から外されがちな要素については、やはり取り扱っていないのは残念だ。理論だけでなく、英語の語彙の実情を観察する視点も欲しい。Sinclair, et al. (1991) は連結形を含め、接辞の用例を多く集めている。また、語根を軸に語の構造を示して語彙力向上を目指した辞典として瀬谷（2001）があり、辞書の語形成情報に語根を取り入れるべきかどうか、考慮の対象として興味深い。しかし「語根」もまた、定義のゆれが大きく、「語根」と「語幹」の区別が一定でないということも付け加えておく。

参考文献

- Adams, V. (1973) *An Introduction to Modern English Word-formation*, Longman, London (『現代英語の単語形成論』杉浦茂夫、岡村久子訳 1978 こびあん書房).
- 荒木一雄、他編 (1982) 『新英語学辞典』研究社.
- 羽鳥博愛 編 (2000) 『ニューヴィクトリーアンカー英和辞典』学習研究社.
- 井上永幸・赤野一郎 編 (2003) 『ウィズダム英和辞典』三省堂.
- 小稲義男、他編 (1980) 『研究社新英和大辞典』第5版 研究社.
- 小西友七、他編 (1992) 『ラーナーズプログレッシブ英和辞典』小学館.
- 小西友七、他編 (1999) 『アクティブジーニアス英和辞典』大修館書店.
- 小西友七・原川博善 編 (2002) 『ベーシックジーニアス英和辞典』大修館書店.
- 小西友七・東森勲 編 (2004) 『プラクティカルジーニアス英和辞典』大修館書店.
- 小西友七・南出康世 編 (2001) 『ジーニアス英和大辞典』大修館書店.
- 國廣哲彌・堀内克明 編 (1999) 『プログレッシブ英語逆引き辞典』小学館.
- Murray, J., et al. (eds) (1992) *The Oxford English Dictionary, Second Edition on CD-ROM*, Oxford University Press, Oxford. (*OED*²)
- 松浪 有・池上嘉彦・今井邦彦 共編 (1983) 『大修館英語学事典』大修館書店.
- 竝木崇康 (1985) 『語形成』大修館書店.
- 大石 強 (1988) 『形態論』開拓社.
- 小野尚之 (2004) 「語の構造」(小野隆啓、他著『英語の構造 — その奥に潜む原理』第3章) 金星堂.
- 瀬谷廣一 (2001) 『語根中心英単語辞典』大修館書店.
- Sinclair, J., et al. (eds) (1991) *Collins COBUILD English Guides, 2. Word Formation*, HarperCollins, London. (コリンズ コウビルド英語表現活用シリーズ2 『語形成』秀文インターナショナル.)
- Summers, D., et al. (eds) (1987) *Longman Dictionary of Contemporary English, New Edition*, Longman, Harlow. (*LDOCE*²)
- 田中茂範、他編 (2003) 『Eゲイト英和辞典』ベネッセ.
- 寺澤芳雄 編 (1999) 『英語語源辞典』縮刷版 研究社.
- 山岸勝榮、他編 (2003) 『スーパー・アンカー英和辞典』第3版 学習研究社.
- 山岸和夫、他編 (2001) 『新グローバル英和辞典』第2版 三省堂.

